

主催◎一般社団法人文化財保存修復学会

共催◎東京国立博物館

協力◎(独)国立文化財機構

後援◎文化庁・台東区・日本文化財科学会・日本博物館協会・

全日本博物館学会・読売新聞社・

文化遺産国際協力コンソーシアム・

NPO法人文化財保存支援機構・

NPO法人文化財夢工房

# 文化財をまもる

公開シンポジウム

文化財のまもり手を育てる

平成22年1月16日(土)

会場●東京国立博物館・平成館 大講堂  
(東京都台東区上野公園13-9)

## 開催趣旨

わが国では古くから美術工芸品を修理し使い続ける伝統が存在してきた。たとえば書画、仏像、漆器・陶磁器等の分野では各修理工房での徒弟制度や伝承・口承による独自の後継者の育成システムが備えられてきた。一方、近年では欧米での教育・研修をうけた専門家により西洋画や彫刻、考古遺物等の分野で修復技術が輸入されている。また国内の大学教育において文化財保存・修復を講ずる課程も急増し、これを修めた学士・修士の保存修復家が活躍する姿が目立っている。このような歴史や現状を踏まえ、「文化財をまもる」シリーズでは第2回として『文化財のまもり手を育てる』を副題にとりあげることにした。

文化財の保護は未来永劫に続く活動であり、保存修復専門家の後継者育成は避けて通れない重要なテーマである。講演等によってその歴史や現状、課題に迫り、同じ文化を背負っている同時代人とともに考え理解を深めることは有意義である。これから文化財保護の世界を目指す若い世代に情報発信することでさまざまな指針を与えることを目的とする。

総合司会 井上 洋一 (東京国立博物館)

10:00～10:05 **開会挨拶**  
実行委員長 三輪 嘉六 (九州国立博物館)

### セッションⅠ 基調講演 座長◎村上 隆 (京都国立博物館)

10:05～10:45 **人材養成に果たす博物館と学会の役割**  
三輪 嘉六 (九州国立博物館)

10:45～11:25 **文化財保存教育40年——将来に向けて**  
沢田 正昭 (国土館大学)

### セッションⅡ 学校教育 座長◎増田 勝彦 (昭和女子大学)

11:30～12:00 **日本における学校教育の現状と課題**  
二宮 修治 (東京学芸大学)

12:00～12:30 **西欧における文化財保存のための高等教育**  
藤原 徹 (東北芸術工科大学)

### セッションⅢ 社会教育 座長◎本田 光子 (九州国立博物館)

14:00～14:30 **東京国立博物館におけるインターン制度  
——インターンシップの未来**  
神庭 信幸 (東京国立博物館)

14:30～15:00 **伝統技術の継承と人材養成**  
岡 岩太郎 (国宝修理装飾師連盟)

### セッションⅣ パネルディスカッション コーディネーター◎西浦 忠輝 (国土館大学)

15:15～16:45 **文化財のまもり手を育てるために**  
三輪 嘉六・沢田 正昭・二宮 修治・藤原 徹・神庭 信幸・岡 岩太郎

16:45～16:55 **総括と閉会挨拶**  
文化財保存修復学会長 三輪 嘉六 (九州国立博物館)

## セッションⅠ 基調講演

### 人材養成に果たす博物館と学会の役割

九州国立博物館 三輪 嘉六



文化財を護るのは、究極のところ人の手による。勿論、直接的には伝統の技であったり、科学的な素材であったりと文化財を維持し、後世に継承していく基盤はさまざま、これまでそれへ向けての調査研究や保存修理などの具体的な現場が提供されてきた。

ここでは博物館という、どちらかといえば文化財を活用する場と受け止められがちであったところが、文化財の保存に向けた展開をどのように果たそうとしているか。また、していかなければならないか。そのあり方に触れながら、九州国立博物館などをはじめいくつかの文化財公開施設で取り組んでいる様相に焦点を当て、文化財の保存に携わるための人材の養成や育成の実際を考えてみたい。

また、文化財を様々な視点から調査・研究する学会は多数に上っているが、それぞれの学問の領域を越えて、学際的にあるいは相互に連携し合いながら文化財を護る姿を紹介し、その伸長に取り組んでいる状況を眺めたい。

そして、文化財を護ることに関連する調査や研究、更には文化財の背景に“ひと”の存在が不可欠であること、しかもその人が真に文化財を愛する心を併せ持つことの大事さを訴えたい。文化財を護る人の養成は一朝一夕にできるものではないが、まずこうした精神面での博物館教育の必要性も提示してみたい。



外国人(タイ)に対する文化財保存についての研修状況〔於：九州国立博物館〕



市民に対して文化財の保存修理状況が見える場の提供(文化財への新しい関心)〔於：九州国立博物館〕

### 文化財保存教育40年——将来に向けて

国土館大学 沢田 正昭



文化財をまもる「手」があつかう相手の種類は多種多様で、あまりにも幅が広い。取りあげる相手次第では、その歴史はいにしへの奈良時代にまでさかのぼるかもしれない。小文では、文化財に関連する行政機関や公的機関、さらには大学教育で始められた人材養成について、自分が体験してきた40年間ほどをふり返りながら育成の実態を紹介し、今後の人材養成のあり方について考えてみたい。

この種の分野の急速な進歩をみせたもののひとつが埋蔵文化財をあつかう手であった。日本列島改造論が叫ばれ、あちこちで国土開発が進んだ昭和40年代の頃である。開発事業によって多くの遺跡が発見され、考古学調査が大いにおこなわれた時期、それにとまって膨大な量の遺物が掘り出されたのである。日本における多くの遺跡は湿地なので、1,000年以上もの長い間、土中に埋もれていた遺物、特に木材などの有機質遺物は過分の水を含んでいる。発掘後、不用意に乾燥させると元の形がわからなくなるくらいに変形し、縮んでしまう。こうしたきわめて脆弱な遺物をまもる「科学の手」が当時の日本には無く、ヨーロッパの進んだ技術を取り入れながら、日本独自の保存技術が開発されていった。

文化庁は、昭和41年、埋蔵文化財発掘技術者研修を計画する。そして、その研修事業は今日もおこなわれている。それは、現在の文化財機構の博物館や文化財研究所が定期的に、あるいは日常的に実施している。他方、大学の場では昭和39年、東京芸術大学で初めて修士課程でその手の育成を始めた。今日では、30校以上の大学や専門学校で、それぞれの特徴を活かしながら充実した教育が展開されている。

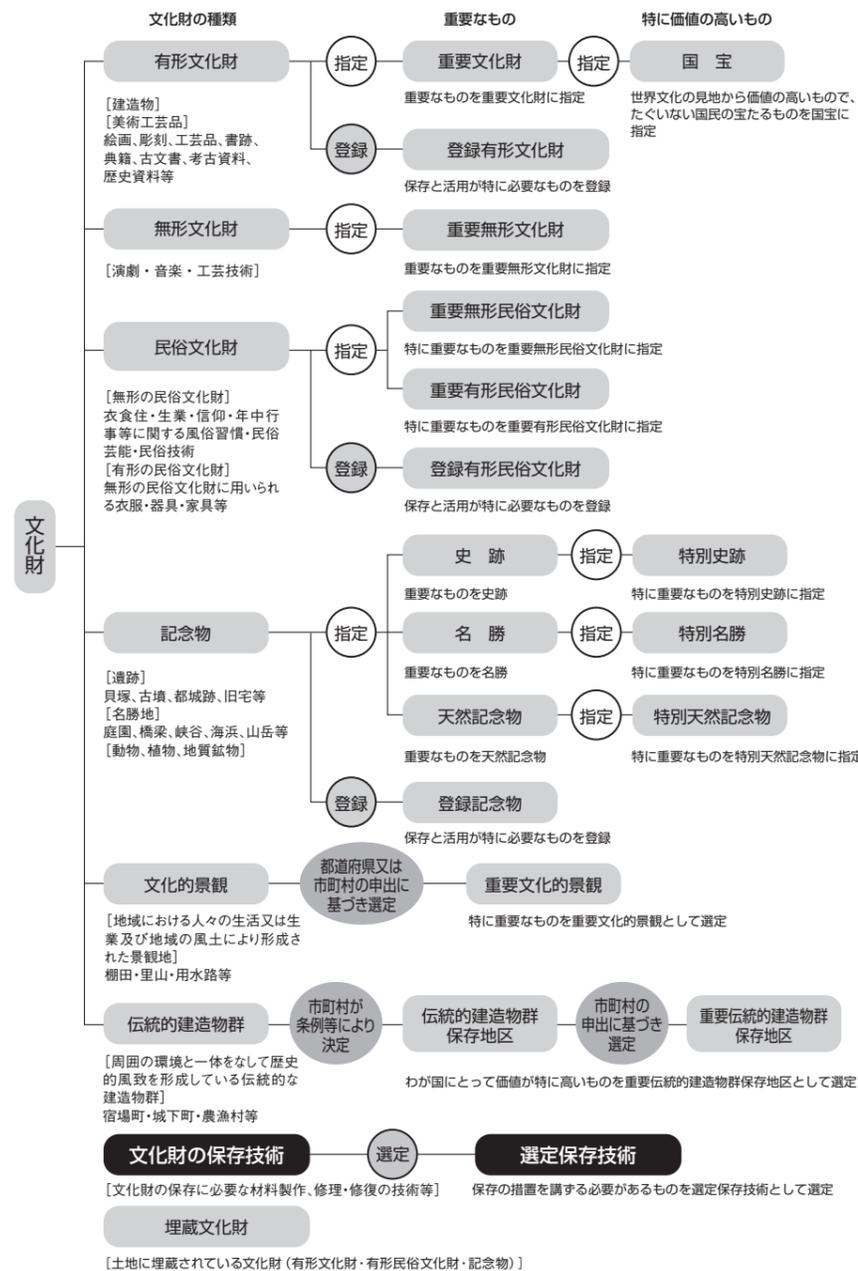
# 日本における学校教育の現状と課題

東京学芸大学 二宮 修治



平成20年3月に学習指導要領の改訂がなされ、新たな視点での教材の開発と活用の充実が挙げられている。平成21年度から一部先行実施、平成24年度から全面実施される。

改訂の経緯として、①確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」を育むことの重要性、②OECD（経済協力開発機構）のPISA調査（児童生徒の学習到達度調査）など各種の調査による我が国の児童生徒について示された幾つかの課題が挙げられ、中央教育審議会の答申により各学校段階や各教科等にわたる学習指導要領の改善の方向性が示された。今回の改訂の基本方針として、①「生きる力」を育成、②知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視、③豊かな心や健やかな体を育成の3項目を掲げている。特に、①伝統と文化を尊重し、これらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与、②総合的な時間を中心に行われる教科等の枠を超えた横断的・総合的な課題について探究活動の質的な充実、③先人の伝記、自然、伝統と文化、スポーツなど生徒が感動を覚える教材の開発と活用などにより内容の充実を図ることとしている。



文化財保護の体系図（文化庁：文化財保護法 第2条、第92条、第147条）

文化財保護法では文化財が定義されており、文化財保護の体系（図）が示されている。一方、「世界遺産条約」は、世界遺産を保護し次世代に伝えることを目的とし、自然と文化は相互に補い合う関係にあり、人類と自然とが切り離されずに繋がっているという考えがある。文化遺産教育の実践例として、「地域学」としての試みとして、ふるさとの名を冠した地域学を導入する学校が増加している。総合的な学習の時間などを使って地域の歴史や文化を見つめ直し、将来の文化財のまもり手としての自覚を促すことが行われている。

現在の文化財教育の現状を問題点を検討し、文化遺産教育の体系化を目指します。

# 西欧における文化財保存のための高等教育

東北芸術工科大学 藤原 徹



## 文化の積み木崩し

中世から利権争いによる戦争のため国土を破壊し、産業革命以降急激に発展したヨーロッパは、同様に霧のロンドンというような環境破壊も経験した。産業優先のなかで人間の営みが潤いのないものとなりながら地域の特徴も薄らいでいた。そうした経験から景観をも含めて人間の暮らしを豊かなものにしようという思想が発達した。結果、現在では世界中の人たちが訪れてみたい地域となった。忌まわしい記録であれ大切に残し、そうした歴史的失敗から多くの事を学んできたのである。

ここ数十年、世界遺産とか文化遺産という言葉をしつぱしば耳にするが、それを守り伝えていくという行為は、文化と歴史をしっかりと認識した上で組み立てていかなければ、土台の危ういものとなる。人間の心豊かな営みに機軸を置き、利権争いだけになりかねない文化財認定という行為を進めていかなければ、「仏作って魂入れず」ではないが人間の愚かさ、浅はかさはまた避けられないことではある。気忙しく文化というものを前に推し進めようという思想の中で、未来の選択は過去の積み重ねの上に立っている。それらを大切にすることは現在を本当に豊かにするためである。人間の基本能力に添った文化の発展がなければ、また忌まわしい能力戦争へと邁進し、積み木を崩す方向へと舵を取ってしまう。

芸術と文化は人類の美しい暮らしを育むことに希望を抱かせてくれた。一枚の絵でも彫刻でもなく、それらを通して再び人間にその希望と力を思い起こさせることこそ重要であると思う。繰り返される積み木崩しの行為のなかで、修復の仕事は壊れてしまった物や痛んだ物をコツコツと積み返すことが出来る仕事である。そんなことを考えながら文化財に向かい合う日々です。



実技演習の一部は学校の近くにある中世に建てられたサンマルタン教会の工房で行っていました

## 東京国立博物館におけるインターン制度 ——インターンシップの未来

東京国立博物館 神庭 信幸



### はじめに

東京国立博物館保存修復課が初めてインターンを受け入れたのは平成19年からで、毎年2週間、年に1度実施している。募集は博物館教育課を通じて行い、大学院在籍者を対象に履歴書による書面審査と面接による審査によって受け入れを決定する。初年の平成19年度は4名、20年度が3名、21年度が2名の予定である。受入れ可能な人数は業務の繁忙さに大きく左右されるために受入れ時期の決定は重要な要素である。

現在のインターン受入れは、受入れ側とインターンの双方にどのような効果をもたらされているのか、あるいは本来東博が目標とするインターンの姿とはどんなものであるのか、それを実現するためにどんなことを解決しなければならないかなどについて、これまでの経験に基づき検証してみたい。

### 研修内容

東博保存修復課が行う業務は多岐にわたり、それらを整理すると①作品及び環境のモニタリング、②予防保存、③修理保存、④教育及び普及、⑤課運営である。4番目がインターンの受け入れや、その他に特集陳列「東京国立博物館コレクションの保存と修理」や本館17室「保存と修理」の実施などを含む項目である。

インターン生が東博内で具体的に関係する業務は①から④の項目にわたる。具体的には、①は作品および環境の調査・診断そして報告書(カルテ)作成である。②は温湿度の安定のための改善、有害ガスの排除、統合的有害生物管理、輸送の安全確保対策、災害対策。③は対症修理、本格修理のための事前調査、修理報告書の刊行などである。

### 現行制度の限界

保存修復課がインターンを受け入れるためには以下の点に関して全館的なコンセンサスの形成が前提であった。つまり、インターン生は実物作品の取扱いを行わないという点である。そのため内容的には就労体験学習と言った方が適切かもしれない。取扱いで発生した事故に関する責任と保障について、現状では館内においてまた学生が所属する大学との間において十分な整理がなされていないためである。

平成19年度からはNPO法人文化財保存支援機構と共催による「文化財保存修復専門家養成実践セミナー」を専門家向けに開始している。こちらも同様に具体的な作品の取扱いや処置に関しては課題がある。



職員から油彩画の取り扱いについて説明を受ける研修生

## 文化財のまもり手を育てるために

コーディネーター 国士館大学 西浦 忠輝



### 講演者紹介

三輪 嘉六(みわ かるく)

九州国立博物館長

日本大学史学科卒業。奈良国立文化財研究所研究員、文化庁主任文化財調査官、東京国立文化財研究所修復技術部長、文化庁美術工芸課長、同庁文化財鑑査官、日本大学教授を経て、1998年より九州国立博物館設立準備室室長、2005年より現職。

文化審議会文化財分科会専門委員、世界遺産特別委員会委員をはじめ、各地で文化財の保存・活用についての各種委員を務める。99年から文化財保存修復学会会長に就任。

専門は考古学、博物、文化財学。

著書に『日本馬具大観Ⅰ～Ⅳ巻』(編著、吉川弘文館)、「家形はにわ」(『日本の美術』至文堂)、「美術工芸品をまもる修理と保存科学」(『文化財を探る科学の眼5』国土社)、「Horses in Ancient Times」(『Horses and Humanity in Japan』The Japan Association for International Horse Racing)、「文化遺産危機管理的基本課題」(『1999台湾集々大地震－古蹟文物震災修復技術諮詢服務報告書－』台湾国立文化資産保存研究中心)など多数。

沢田 正昭(さわだ まさあき)

国士館大学21世紀アジア学部教授

1967年金沢大学教育学部中等教育学科卒業、69年東京芸術大学美術研究科保存科学専攻修了。奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長、筑波大学大学院・人間総合科学研究科・世界遺産専攻教授を経て、2006年より現職。文化財保存修復学会諮問委員、日本文化財科学会会長。

専門は文化財の保存科学、特に遺跡の保存と活用。現在は古代壁画の分析と保存に関心をもつ。

二宮 修治(にのみや しゅうじ)

東京学芸大学教育学部教授

1974年東京学芸大教育学部卒業、76年同大学大学院教育学研究科理科教育専攻修了。同大学助手、助教授を経て、2002年より現職。

08年より東京学芸大学附属世田谷中学校長(併任)。

専門は、文化財科学・文化遺産教育、特に、文化財分析化学、文化財環境化学。現在は、考古資料の生産と流通、美術工芸品の制作技法、有形文化財の保存環境に興味をもつ。

著書に「文化財科学と考古学」(『現代社会の考古学』現代の考古学1(朝倉書店、2007))、「アーカイブスの保存と環境2 空気環境」(『アーカイブスの科学 下巻』(柏書房、2003))、「微量成分元素存在量による消費地遺跡出土磁器片の生産地推定－肥前磁器を中心に－」(『全面改訂 新しい研究法は考古学に何をもたらしたか』(クパプロ、1995))がある。

藤原 徹(ふじわら とおる)

東北芸術工科大学教授

1995年仏国ツール美術大学美術作品保存修復学科卒業。宮城県美術館を経て、2004年より現職。

宮城県美術館彫刻原型保存修復員。

専門は立体作品の保存修復。後人の育成に興味をもつ。

修士論文は、「コント・ド・ノジョン作「コロンプを持つ女」の修復報告書(オルレアン美術館) ツール美術大学1996年。著書に、「佐藤忠良の石膏原型修復報告」(宮城県美術館研究紀要、2004)、「海を渡った黒い聖母」(フランスから鶴岡へ(東北芸術工科大学文化財保存研究センター、2008))がある。

神庭 信幸(かんばん のぶゆき)

東京国立博物館学芸研究部保存修復課長

1977年東京都立大学理学部物理学科卒業、79年東京芸術大学美術研究科大学院修士課程保存科学専攻修了、97年博士(美術)。

92年国立歴史民俗博物館情報資料研究部助教授、98年東京国立博物館学芸部保存修復管理官を経て、2001年より現職。

文化財保存修復学会理事。

専門は文化財の保存科学、特に予防保存と修理保存。伝統と科学の融合的かつ実践的な保存手法として博物館における臨床保存学の確立に取り組んでいる。

2008年保存修復学会業績賞受賞。

主な論文に「文化財の輸送、展示、収蔵のための小空間における湿度・水分の変化に関する保存科学的研究」学位論文(1997)、「東京国立博物館における環境保全計画－所蔵文化財の恒久的保存のために－」MUSEUM、第594号(2005)、「MEASUREMENT AND ANALYSIS OF THE GLOBAL TRANSPORT ENVIRONMENT FOR PACKING CASES FOR ARTIFACTS」Preprints of the IIC Congress 2008, Londonがある。

岡 岩太郎(おか いわたろう)

国宝修理装演師連盟理事長

1965年多摩美術大学日本画科卒業。65年岡墨光堂(現株式会社岡墨光堂)入店。1983年より同社代表取締役(～2007年)。01年より現職。

京都造形芸術大学歴史遺産学科客員教授。京都工芸繊維大学特任教授。文化財保存修復学会諮問委員。

専門は装演技術による文化財修理。現在は古代の紙に興味をもつ。

02年文化庁長官表彰受賞。08年第2回文化財保存修復学会賞受賞。

著書に、「特集 最近の文化財修理 {絵画} 根津美術館蔵那

## 伝統技術の継承と人材養成

国宝修理装演師連盟 岡 岩太郎



わたしたち国宝修理装演師連盟は、装演技術を用いて文化財修理を行っている技術者団体である。その技術は、本紙を修理する技術と仕立てる技術に大別される。紙や絹にかかれた本紙は、そのみでは飾ることも保存することもできない。そこで、掛軸や卷子、屏風、襖、冊子など、長い年月の中で多彩な形式が生まれ、形作るという技術も伝統技術として継承されてきた。

この半世紀を振り返ると、伝統技術の継承のありかたは大きな変化を遂げたことがわかる。半世紀前、技術の伝承は完全な徒弟制度の中にあつた。連盟設立後のこの50年は、それまで個々の工房が独自の技術、考え方で修理にあたっていた状態から、修理技術者としての共通認識を持ち、組織として文化財を守り、修理技術者を育成していくという方向へ大きく転換していった歴史であつたといえる。高度な専門性を持つ技術者集団としての自覚は、半世紀の間に連盟が取り組んできた数々の事業を経て獲得されてきた。

伝統的な仕立ての技術に加えて、本紙修理に精通しなければならない現代の装演技術者は、徒弟制度の時代に比べると、一人前の技術者になるために長い時間を費やす必要がある。資格制度等による技術者の身分保障や、個人研修、講習会の開催など、文化財を守る後継者が安心して仕事に専念し、自らのステップアップをはかることができる体制づくりに関しては、今後も連盟としてバックアップを惜しまない。その一方で、個々の技術者が自らの技術の習得と見識眼を養うべく邁進することを願っている。「文化財を守り安全に次の世代に伝える」という全員の共通理念を具現化するため、わたしたち連盟としては、今後も組織として後継者を育成する努力を続けていきたい。そのことが、新しい伝統の継承のかたちであると考えている。

智瀧図』『仏教芸術』195号(毎日新聞社、1991)、「装潢における合成樹脂」『国立民族学博物館調査報告』36号、「合成素材と博物館資料」(園田直子編、2003)、「和紙の修復と保存」『文化財学の構想』(三輪嘉六編、勉誠出版、2003)がある。



**西浦 忠輝** (にしうら ただてる)

国士舘大学イラク古代文化研究所教授、大学院グローバルアジア研究科文化遺産分野教授。

1947年東京生まれ。東京文化財研究所国際文化財保存修復

協力センター長代理、保存科学部長などを経て、2004年より現職。東京文化財研究所名誉研究員、文化財保存修復学会理事、日本イコモス(国際記念物遺跡保存会議)国内委員会理事、NPO法人文化財保存支援機構副理事長、日本西アジア考古学会副会長、東アジア文化遺産保存学会副会長。

専門は文化遺産学(保存科学)。屋外文化財の環境、劣化と保存修復対策の調査研究を行い、多くの国際プロジェクトに参画。

著書に『人類の歴史を護れ：戦中、戦後における文化遺産の保護と国際協力』(編集、クバプロ、2005)、『文化遺産の保存と環境』(共著、朝倉書店、1995)、『文化財の保存と修復』(共著、クバプロ、1999～2009)など。保存科学に関する論文多数。

## 文化財保存修復学会の沿革

文化財保存修復学会(旧・古文化財科学研究会)の活動は、昭和8年に滝精一博士の提唱によって発足した「古美術保存協議会」に始まります。戦後にいたって、「古文化財之科学」(柴田雄次編集)を創刊し、昭和50年には会の名称を「古文化財科学研究会」と改め、文化財に関する幅広い研究活動を続けてきました。しかも近年、文化財の科学的研究が盛んになるにしたがい、この分野における草分けともいべき本会に課せられた責任は、ますます重みを加えつつあります。そうした要求に対応するため、本会は平成7年に「文化財保存修復学会」として新たなスタートを切りました。

本会の特長として、物理、化学、生物など自然科学諸分野の専門研究者はもちろん、考古学・建築史学・美術史学など人文科学部門の研究者、文化財保存関係機関の専門家・技術者・博物館や美術館の学芸員、その他文化財の科学的研究に関心をもつ多くの分野の方に参加いただいています。

(「入会のしおり」より)

### ◎文化財保存修復学会の連絡先

〒110-0008 東京都台東区池之端4-14-8  
ビューハイツ池之端102号室  
NPO法人文化財保存支援機構気付  
Tel: 03-6661-2982 Fax: 03-6661-2983  
E-mail: jsccp@sepia.ocn.ne.jp

## 文化財の保存と修復シリーズ刊行のお知らせ

### 文化財の保存と修復① 文化財をまもる人たち

文化財保存修復学会編／B5版変型判／108頁  
ISBN 978-4-87805-105-0 C1070／定価：本体価格1,400円＋税  
平成21年10月20日第1版発行

※本書は平成20年12月に開催されたシンポジウム「文化財をまもる 文化財をまもる人たち」の講演収録集です。

#### 第Ⅰ部 平面作品の保存と修復 東洋絵画と西洋絵画を中心に

1. 装こう修理をめぐる現状と課題  
国宝修理装潢師連盟理事長 岡 岩太郎
2. 西洋絵画の保存と修復  
山領絵画修復工房 山領 まり
3. ICCROM における人材育成  
文化財保存修復学会副会長／昭和女子大学教授 増田 勝彦

#### 第Ⅱ部 立体作品の保存と修復 漆工品と仏像を中心に

1. 漆工品の修理  
漆芸家・重要無形文化財保持者 北村 昭斎
2. 彫刻の保存修理について 仏像彫刻を中心に  
美術院国宝修理所所長 藤本 青一
3. 文化財をまもる技術の保護  
文化庁文化財部伝統文化課課長(当時) 有松 育子

#### 第Ⅲ部 総合討論

コーディネーター 村上 隆

文化財保存修復学会公開シンポジウム実行委員会  
委員長●三輪 嘉六  
副委員長●西浦 忠輝  
委員●井上 洋一・宇田川 滋正・神庭 信幸・  
日高 真吾・本田 光子・松田 泰典・  
村上 隆・荒木 臣紀

<問い合わせ先>  
(株)クバプロ  
〒102-0072 東京都千代田区飯田橋3-11-15  
UEDAビル6F  
Tel: 03-3238-1689 Fax: 03-3238-1837  
E-mail: symposium@kuba.jp